AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

旭川医科大学研究フォーラム (2017) 第17巻:74-76.

海外留学で学んだこと－ ElectiveProgram inTropicalMedicineに参加して－

綾谷 有美香, 野村 明日香, 宮澤 愛梨, 室田 美晴

旭川医科大学研究フォーラム 17　：74 ～ 76，2016

海外留学の報告

海外留学で学んだこと
－ Elective Program in Tropical Medicine に参加して－

綾　谷　有美香　　野　村　明日香　　宮　澤　愛　梨　　室　田　美　晴

1．はじめに

今夏、私達はタイのマヒドン大学で行われた Elective Program in Tropical Medicine に参加しました。旭川医科大からの参加者は、医学科３年生４名でした。この留学を通して多くのことを学び、他の大学、他の国の学生、医師の方と共に参加することでたくさんの貴重な体験ができました。このプログラムを通して、特に印象に残ったことを中心に書きたいと思います。

2．プログラムでの学び（前半）

プログラム前半の二週間では、バンコクの Mahidol（マヒドン）大学で熱帯医学を学びました。このプログラムには、オーストリアや台湾の医学生や、大阪医科大学の医学生、日本やタイの医師も参加していました（彼らとの交流については、後に詳しく述べます）。

プログラムでは、熱帯医学の講義や実習、実際に患者さんを診察する Ward Round（病棟回診）、バンコク市内の他の病院、施設への訪問が組み込まれ、会話や授業は全て英語で行われました。

〇講義と実習

講義では、Malaria（マラリア）や Dengue（デング熱）、Japanese encephalitic（日本脳炎）など、日本でもよく知られた熱帯病から、Leptospirosis（レプトスピラ症　細菌の一種であるスピロヘータによって引き起こされる感染症。東南アジアや中南米など熱帯地域で多く見られる。）、Melioidosis（類鼻疽　類鼻疽菌によって引き起こされる感染症。おもに熱帯地域でみられる。）、Chikungunya（チクングンヤ熱　デング熱と似たような症状を示す蚊媒介性の伝染病。）、Rickettsial diseases（リケッチア症　細菌の一種であるリケッチアによって引き起こされる感染症。日本においては、ツツガムシ病がある。）についてや、熱帯病の予防や vector（媒介　マラリアやデング熱においての蚊のようなもの。）について、熱帯地域における Common parasitic infection（熱帯地域でよく見られる、寄生虫によって引き起こされる疾患について）、狂犬病や蛇の毒などについて取り扱いました。

講義内容は、その疾患の vector（媒介）や症状、診断の付け方や、歴史、感染地区や人口についてでしたが、その内容は高度で、実際の患者さんのデータを持ち出しながら、説明を行うという形式でした。

授業で取り扱った疾患の病変や、寄生虫については、実習で、顕微鏡を用いて観察しました。数人の、タイの先生が担当してくださったのですが、質問をすると、詳しく図を描くなどして熱心に指導してくださいました。空いた時間に、他の参加者と、その疾患の病態と照らし合わせながら、実際の病変を観察し、話し合うなど、とても有意義な時間を過ごしました。

〇 Ward Round（病棟回診）

Mahidol（マヒドン）大学の熱帯病専門の病院で、六人程度に分かれて、実際の患者さんを診察しました。担当してくださる先生がいたのですが、診察の最中は、先生は、患者さんのタイ語を英語に訳すなど最低限の介入しかしなかったので、参加者だけで、血液検

*旭川医科大学病院

査の結果や診察の結果から、その疾患について話し合いました。

その後、担当の先生から、どの疾患が考えられるか、その治療法は？などの質問が投げかけられ、それについての詳しい説明を、先生がしてくださる、という形式でした。

講義で習った、疾患の症状について、実際に見ることで、その疾患に対する理解を深めました。

〇病院、施設見学

Mahidol（マヒドン）大学内の Fever clinic（発熱で来院した患者さんは、一旦ここで、熱帯病かどうか診断するそうです。）や、Siriraj（シリラート）病院（タイ国内最大最古の病院らしいです！とても大きかったです。）や病院内の博物館、Prasat Neurological Institute（ギラン・バレー症候群の患者さんについての説明を受けました。）、Thai Red Cross（タイ赤十字）とその中の Snake farm（たくさんの蛇が展示されていて、蛇と触れ合えるコーナーもありました！）を訪問しました。病院では、病院の施設についての説明や、患者さんについての説明、治療風景などを見学しました。Siriraj（シリラート）病院の Congdon Anatomical Musical（解剖博物館）では、おそらく日本では見ることのできないような、奇形児や人間の標本を見学することが出来ました。Thai Red Cross の Snake farm では、実際に展示されている蛇を見学したり、蛇毒の血清を作るための毒の採取を見学しました。

－マヒドン大学の先生方と参加者で集合写真－

3．プログラムでの学び（後半）

後半の２週間は、Travel Medicine という科でタイの研修医１～３年目の先生方と一緒に研修を受けさせてもらいました。Travel Medicine とは、日本語で渡航医学と呼ばれ、渡航に際した感染症予防（ワクチン、マラリア予防薬、防虫対策など）、高山病やダイビングの際の問題、渡航中のメンタルヘルス、緊急時対応、インフルエンザ対策、渡航後の診療問題などを扱っています。

研修は主に座学と実習から成っていました。座学では Diploma of Tropical Medicine and Hygiene を取得しに来られた先輩医師や公衆衛生について学びに来られた学生の方々と旅行者下痢や高山病など Travel Medicine で扱う症例について授業を受けました。講義中でも生徒が自由に質問する雰囲気があり、相互にコミュニケーションをとりながらの講義は印象的でした。実習ではマラリアやデング熱等の感染症罹患のため入院されている患者さんの病棟に行き、病態や患者さんへのカウンセリングを通して、何の疾患であるかディスカッションをしました。また、腹痛や頭痛を訴えてこられた外来患者さんの診察も見学させてもらいました。勉強不足で臨んでしまったことと、医学英語の知識不足から、内容についていけないことが多々ありました。しかし、その度に指導医の先生や研修医の先生方が分かるまで説明してくださったお陰で、感染症の知識に留まらず、聴診や打診の方法や確定診断のプロセスに関する理解も深めることができました。

4．他国の留学生との触れ合いを通じて

このプログラムを通じて、多くの留学生と出会い、多くの刺激を受けました。前半２週間は、タイの医師１人、聖路加国際病院の医師１人、大阪医科大学の学生２人、オーストリアの学生９人、台湾の学生１人と共に学び、後半２週間はタイの医師10人と共に学びました。他国の留学生と触れ合うことで、タイの文化のみではなく、他の留学生の出身国の文化についても知ることができ、とても有意義な時間でした。

彼らとの触れ合いを通じて、一番身にしみて感じたのは、英語力不足です。私たちは講義中に出てくる単語を調べ理解することで精一杯であったのに対し、彼らは講義の内容を難なく理解し、積極的に質問もしていました。今後、世界がさらにグローバル化していく

中で、このように英語力不足のために、学ぶ量に差が生まれるのは避けなければいけないと考えます。医学知識を学ぶのはもちろんのことですが、これからはもっと英語の勉強にも精を出していきたいと思いました。

放課後は、彼らとともにディナーを食べたり、プールで泳いだり、買い物に行ったりと、とても楽しい時間を過ごしました。多くの時間を共に過ごすことで、何気ないところに文化の違いを感じることがでました。日本・タイを含むアジア人の女性は白い肌を美しいと思うが、ヨーロッパの女性は焼けている肌を健康的で美しいと思うことや、オーストリアの隣国イタリアの医学部では宗教的な関係で解剖をしないこと、などなど様々な点で日本との違いを見つけることができ、とても興味深かったです。

今回の留学では、全員が医師を目指していることもあり、学ぶ国は違いますが、特別なつながりを感じました。連絡先を交換し、今でも連絡を取り合う程の仲になりました。今回の留学での出会いを一生大切にしたいと思います。

－前半プログラムの参加者でパーティー－

5．その他

今回のプログラムでは、土日は休日であり、平日の夕方は休みだったため、観光や買い物に行き、タイの文化をたくさん知ることが出来ました。実際に現地の料理を食べてみると、日本で食べられているタイ料理が日本人向けで辛くなかった（タイの料理はとても辛かったです）ことを知りました。また、タイのコンビニエンスストアはセブンイレブンが主流で日本語が書いてある商品も見かけました。バンコクでは、日本の企業も多く進出しているため、日本にいるような不思議な感覚になるときもありました。

また、今回の留学が初めての海外である参加者が２名いたことや４週間知らない環境で過ごすというストレスがあったせいか、参加者の多くがタイで病院に行くこととなりました。参加者の一人はプログラムの途中で入院もしてしまいました。しかし、入院先のバムルンラード国際病院が、バンコクでも有名な私立病院であり、日本人女性医師の方もいらっしゃったため、大学では聞けないタイでの病院運営、雇用について聞く良い機会となりました。日本とは違う文化の中で４週間過ごし、慣れない英語での講義や会話はとても大変でしたが、大変貴重な体験であり、今後の自分のキャリアにつなげていきたいと思いました。

最後になりますが、今回の留学には本学の諸先生や学生支援課の方々など、本当に多くの方々にご尽力いただきました。改めてすべての方々に感謝の意を表し、このレポートの締めとさせて頂きたいです。